言語研究（*Gengo Kenkyu*）**156**: 97–123（2019） doi: 10.11435/gengo.156.0_97

アラビア語チュニス方言における否定と非現実モダリティ

熊　切　　拓

【要旨】アラビア語チュニス方言の一般的な否定文は，接頭辞 maː- と接尾辞 -ʃ が述語の前後に共起することによって形成される。maː- は否定辞とみなされているが，-ʃ の機能については定説がない。本研究では，否定以外の用法を含めた -ʃ の機能の包括的な記述，およびモダリティの概念の導入という 2 つの観点から，-ʃ の機能を論じる。-ʃ は否定以外では疑問と想像を表し，否定においては「肯定的事態が事実でない」ことを表す。そこから，-ʃ を非現実（irrealis）モダリティ辞と結論づける。「肯定／否定」の対立と -ʃ の有無による「現実性／非現実性」の対立をかけ合わせると，次の 4 種のモダリティに整理できる。①肯定的現実性を表す文は maː- も -ʃ もなし，②否定的現実性を表す文は maː- のみ，③肯定的非現実性を表す文は -ʃ のみ，④否定的非現実性を表す文は maː- と -ʃ が共起 *。

キーワード：アラビア語方言，否定，モダリティ，非現実性，意味論

1. 本論文の課題

アラビア語チュニス方言の一般的な否定文においては，他の多くのアラビア語諸方言と同じく，2 種の小辞 maː-（接頭辞）と -ʃ（接尾辞）が共起する [1]。

（1）　muːlaːt-haː　　**maː**-qaːlit-**ʃ**
所有者 F.SG-ACC.3F.SG　NEG- 言う PERF.3F.SG-IRR
ʕlaː-sm-haː
～について - 名前 -GEN.3F.SG
「その（物語の）所有者（すなわち語り手）はそのタイトルについては言わなかった [I-009]」[2]

* 2 名の匿名の査読者より多くの貴重なご指摘とコメントをいただいた。ここに記して心より御礼申し上げたい。言うまでもなく，残された不備はすべて著者自身の責任である。なお，本稿は，2018 年に提出した博士論文「アラビア語チュニス方言の否定とモダリティ」の一部を発展させたものである。指導教官の西村義樹先生と，Wilmsen（2014），Lucas（2013），Chaâbane（1996）をご教示くださった熊本裕先生にも謝意を表したい。

[1] -ʃ は [-ʃ] と [-ʃiː] という短長 2 種の異形態を持つ。長形のほうが歴史的には古い形式であるが，短形のほうがより一般的である。本論文においてはこの短形をこの形態素の表記として統一的に用いる。なお，ʃ はアラビア語研究の伝統においては，多くの場合 š と表記される。本論文では，引用文献において š が用いられている場合は ʃ に改めた。

[2] 本論の例文には，方言で書かれた以下の物語集から採取したものが含まれる。

Al-ʕArwiː, ʕAbd-al-ʕaziːz (1989) *ḥikaːjaːt al-ʕArwiː*. 2nd ed. Vol. I. Tunis: Al-Daːr Al-Tuːnisiːja li-l-Naʃr.

Al-ʕArwiː, ʕAbd-al-ʕaziːz (1989) *ḥikaːjaːt al-ʕArwiː*. 2nd ed. Vol. II. Tunis: Al-Daːr Al-Tuːnisiːja li-l-Naʃr.

この資料の文と音韻の解釈は，第 1 巻では Ouacel Krir 氏（40 代男性，チュニス生まれ），第

接頭辞 maː- は，古典アラビア語期より用いられてきた否定辞（略号 NEG）であり，ここでも否定辞として機能している。いっぽう，接尾辞 -ʃ は方言独自の発展によるものであり，その意味機能に関しては諸説が提出されており，定説はない。本論文は，これらの諸説を検討したのち，モダリティの観点から -ʃ の意味機能を総合的に分析し，-ʃ が否定において非断定性と非事実性を表示する非現実性（irrealis）モダリティ辞（略号 IRR）であることを明らかにする。

本論文の構成としては，まず第 2 節でチュニス方言の概略を述べる。第 3 節では，チュニス方言の否定文の概略と本論の課題について述べる。第 4 節では，-ʃ についての先行研究を検討し，本論の立場を明らかにする。第 5 節では，否定以外の -ʃ の用法についてまとめ，-ʃ が非現実モダリティを表示することを明らかにする。第 6 節では，この -ʃ が否定においていかなる役割を果たしているかを論じる。第 7 節はまとめである。

2. アラビア語チュニス方言の概略

アラビア語チュニス方言（以下チュニス方言）は，アフロ・アジア語族のセム語派に含まれるアラビア語の変種の 1 つであり，北アフリカの諸方言を含むマグレブ方言に分類される。

音韻的特徴としては，他のセム系言語と同じく，強調音（咽頭化音・口蓋化音）を有することが挙げられ，これを本研究では咽頭化音を表す IPA の補助記号 /ˤ/ で示す。借用語にのみ現れるものを除いた子音音素は以下の 30 種である（IPA に準ずる）。/b, m, f, θ, ð, ðˤ, t, tˤ, d, dˤ, n, s, sˤ, z, r, rˤ, l, lˤ, ʃ, ʒ, k, g, x, ɣ, q, ħ, ʕ, h, w, j/。母音音素は，/i, a, u/ およびその長母音 /iː, aː, uː/ の 6 種である [3]。

文法的特徴についてまとめると，この言語は男性（M.）・女性（F.）の 2 つの名詞クラスを持ち，単数・複数（SG./PL. まれに双数 DU.）の区別も形態的になされる。動詞は単複・人称（1/2/3）によって活用し，3 人称単数形にのみ男女の区別がある。動詞の活用には，完了形（PERF.）・未完了形（IMPF.）・命令形（IMPR. 肯定のみ）の 3 系列がある。人称接尾辞には対格（ACC.）と属格（GEN.）があり，後者は前置詞にも接尾される。

以下に，上に記した以外の本研究で用いる記号の意味を記す。

《 》：語・定型句・構文の意味　「 」：文の意味　[ ]：句・文・構文の構造
-：形態素境界　定：定冠詞　IRR：非現実モダリティ辞　NEG：否定辞

なお，本研究で用いる資料は，2001 年から 2017 年までの間に筆者がチュニス方

2 巻では Farouk Herz 氏（40 代男性，ガルディマウ生まれ，チュニス在住約 25 年）の解説と朗読に依拠している。引用に際しては，[巻数（ローマ数字）- ページ数（アラビア数字）] の形で示す。協力してくださった両氏に感謝を申し上げる。

[3] 長母音は環境によって短母音化するが，本論文では本来の長さのまま表記した。

言話者を対象として行った語彙的調査・文法的調査に基づいている[4]。

3. チュニス方言の否定文

3.1. **ma:-** と -ʃ

チュニス方言の否定辞は ma:- と la:[5] の 2 種であるが，このうち，否定文において接尾辞 -ʃ と共起するのは ma:- のみである[6]。ma:- と -ʃ に挟まれるのは，文の述語となる動詞句，前置詞句，特定の名詞句，人称辞，特定の副詞である。

チュニス方言の一般的な否定文では，ma:- と -ʃ の共起が義務的であり，-ʃ を削除すると非文となる。

(2)　a.　**ma:-**θamma:-**ʃ**　fa:jda
NEG- ～ある -IRR　利益
「益がない」

b.　***ma:-**θamma:　fa:jda
NEG- ～ある　利益

(3)　a.　**ma:-**xða:-**ʃ**　flu:s
NEG- 取る PERF.3M.SG-IRR　お金
「彼はお金を取らなかった」

b.　***ma:-**xða:　flu:s
NEG- 取る PERF.3M.SG　お金

ただし，チュニス方言では，-ʃ を用いない否定文がすべて非文になるわけではない。たとえば，(2) に《いかなる～も（～ない）》という意味の否定極性表現（Negative Polarity Items: NPI）である [ħatta:-《～も・さえ》不定名詞] を加えた場合は，-ʃ は現れず，ma:- のみで否定文が成立する。

(4)　**ma:-**θamma:　**ħatta:-**fa:jda　cf. (2)
NEG- ～ある　も - 利益
「なんの益もない」

これに限らず，《まったく～ない》という全面的否定を表す構文は，-ʃ なしで否定文が成立する。(5)，(6) は，(3) と同じく [ħatta:-《～も・さえ》不定名詞] を

---

[4] 注 2 にあげた物語集以外の文例は Farouk Herzi 氏によるものである。

[5] la: には，la:《いいえ》という否定の返答としての用法，la: ～ la: ～…《～も～も（～ない）》と反復して用いられて全面的否定を表す用法，《～しないように》の意を表す接続詞としての用法などがある。次に全面的否定の例を挙げる。

(i)　**la:**　ʕraf　**la:**　nahʒ　**la:**　zanqa　**la:**　d-da:rˤ
NEG　知る PERF.3M.SG　NEG　通り　NEG　小路　NEG　定 - 家
「彼は通りも小路もその家も知らなかった」

[6] la: が -ʃ と共起するのは，前置詞 b- とともに b-la:-ʃ《なにもなしに》という前置詞句を作る場合のみである。

含む否定文である。

(5)　**maː**-ʃrˤabt　　**ħattaː**-gaːzuːza
NEG- 飲む PERF.1SG　も - 炭酸飲料
「私は炭酸飲料はまったく飲まなかった」

(6)　**maː**-lqiːt　　fiː-**ħattaː**-blˤaːsˤa
NEG- 見つける PERF.1SG　～の中 - も - 場所
「私はどの場所にも見つけられなかった」

不定名詞のうち，ʃajj《もの》と ħadd《ひと》は，ħattaː-《～も・さえ》を伴わなくても，単独で全面的否定を作ることができ，-ʃ なしで否定文が成立する。

(7)　**maː**-niː　ʃaːriː　(ħattaː-)**ʃajj**
NEG-1SG 買う　能動分詞 M.SG　も - もの
「私は何も買うつもりはない」

(8)　**maː**-qaːbilt　(ħattaː-)**ħadd**　iljuːm
NEG- 会う PERF.1SG　も - ひと　今日
「今日は誰にも会わなかった」

(9)，(10) は，否定辞 maː- を反復する，もしくは maː- と否定辞 laː を組み合わせて使う構文である。この構文では，ありうる事態を列挙して，そのすべてを否定することが表される。

(9)　**maː**-ʕraft　idaː-niː　n-nuːm
NEG- 知る PERF.1SG　連れ去る PERF.3M.SG-ACC.1SG　定 - 眠り
maː-ʕraft　duxt　**maː**-ʕraft
NEG- 知る PERF.1SG　気を失う PERF.1SG　NEG- 知る PERF.1SG
qaddaːʃ　qaʕdit　ttˤiːr　biː-jaː
どれだけ　居る PERF.3F.SG　飛ぶ IMPF.3F.SG　～と -GEN.1SG
「眠りが私を連れ去ったのも知らず，気を失ったのも知らず，それ（ハト F.SG）が私を連れてどれくらい飛んだのかも知らなかった [II-135]」

(10)　**maː**-θammaː　**laː**　xubz　**laː**　ħliːb
NEG- ある　NEG　パン　NEG　牛乳
「パンも牛乳もない」

(11) は，(3) に最小量の否定を表す w-laː kaʕba《少しも～ない》を加えた否定文であるが，これも maː- と laː を組み合わせて全面的否定を表す構文の一種であり，-ʃ なしで否定文が成立する [7]。

[7] kaʕba は《1 つ，1 個，1 枚，1 本》といった物体の最小単位を表し，(11a, b) ではチュニジアの通貨の最小単位である 1 ミッリームを意味する。

(11) a. **maː-**xðaː　flːs　**w-laː**　**kaʕba**　cf. (3)
NEG- 取る PERF.3M.SG　お金　そして -NEG　1つ
「彼は1ミッリームだってお金を取らなかった」

b. **maː-**xðaː　**laː**　flːs　**w-laː**　**kaʕba**　cf. (3)
NEG- 取る PERF.3M.SG　NEG　お金　そして -NEG　1つ
「彼はまったくお金を（lit. お金も1ミッリームも）取らなかった」

(12)，(13) は，主語，目的語などの前に kaːn《～しか》，illaː《～しか》が現れて，他者を全面的に否定することを表す否定文である[8]。他者を全面的に否定するという意味で，これも全面的否定の一種であり，-ʃ なしで否定文が成立する。

(12) **maː-**ʃuft-haː　**kaːn / illaː**　aːnaː
NEG- 見る PERF.1SG-ACC.3F.SG　～しか　私
「私しか彼女を見なかった」

(13) fi-d-daːrˤ　**maː-**riːt　**kaːn / illaː**　umˤmˤ-iː　lbaːraħ
～の中 - 定 - 家　NEG- 見る PERF.1SG　～しか　母 -GEN.1SG　昨日
「昨日，家では母しか見なかった」

kaːn / illaː《しかない》と ʃajj《もの》と ħadd《ひと》が組み合わされて全面的否定を表すこともある。

(14) **maː-**ʃaːf-haː　**ħadd**　**kaːn**　aːnaː
NEG- 見る PERF.3M.SG-ACC.3F.SG　ひと　～しか　私
「私以外の誰も彼女を見なかった」（上の (12) とは異なり，動詞は ħadd に一致）

(15) **maː-**xallaː-l-iː　**ʃajj**　**kaːn**　il-waːlda　tixdim　fi-d-djaːrˤ
NEG- 残す PERF.3M.SG- ～に -GEN.1SG　もの　～しか　定 - 母　働く IMPF.3F.SG　～の中 - 定 - 家 PL
「彼（父）は家々で（お手伝いとして）働いている母以外は私に何も残さなかった [II-117]」

(16) (17) は，人称辞を接尾した ʕumrˤ-《年齢，人生》，もしくは walˤˤaːh《神かけて》が否定文の文頭に現れて，文の表す事態が過去（動詞が完了形の場合）あるいは現在・未来（動詞が未完了形の場合）において存在しないことを表す否定文である。これも全面的否定の一種であり，-ʃ なしで否定文が成立する。

---

[8] kaːn / illaː は肯定文においても排除を表す。肯定文でも使えるので否定極性表現とは言えないが，ここでは便宜上否定対極表現に含めておく。

(ii) mʃaːw　il-kull-hum　**kaːn / illaː**　huːwa
行く PERF.3PL　定 - すべて -GEN.3PL　～以外　彼
「彼以外，彼ら全員が行った」

（16）　**ʕumrˤ-iː**　　**maː**-riːt　　ðˤaww　　kiːf-haːðaːjaː
年齢 -GEN.1SG　NEG- 見る PERF.1SG　光　　～ような - この
「こんな光は見たことない [II-074]」

（17）　**walˤlˤaːh**　　**maː**-naːkil　　lħam　ħalluːf
神にかけて　NEG- 食べる IMPF.1SG　肉　　豚
「私は絶対に豚肉など食べない」

（18），（19），（20）は，特別な表現を用いずに，maː- のみで全面的否定が表される例である。ただし，（18）はことわざ，（19）は物語の締めくくり，（20）は慣用句というように，いずれも定型的な文であり，生産的な否定構文ではない[9]。

（18）　zjaːdt-il-xiːr　　**maː**-fiː-haː　　ndaːma
増えること F.SG- 定 - 富　NEG- ～の中 -GEN.3F.SG　後悔
「富が増えることにおいて後悔などない [II-104]」

（19）　w-bi-l-ʕiːn　　**maː**-riːnaː-hum
そして - ～で - 定 - 目　NEG- 見る PERF.1PL-ACC.3PL
「私たちはもう彼ら（物語の登場人物たちを指す：筆者注）を目にすることは決してありませんでした [II-235]」

（20）　illiː　　**maː**-jnaːm　　il-liːl
関係詞　NEG- 眠る IMPF.3M.SG　定 - 夜
「夜にまったく眠らない者（すなわち神のこと）」

全面的否定を表す否定文のほかに，（21）の慣用句や，（22）の nʃalˤlˤaː《lit. 神が望むなら》に完了形が後続して未来に関する強い願望を表す否定文も，-ʃ なしで否定文が成立する。

（21）　**maː**-ʕand-ik　　saww
NEG- ～にある -GEN.2SG　不幸
「（病人に対して）お大事に（lit. あなたに不幸なことがないように）」

（22）　**nʃalˤlˤaː**　　**maː**-ʒaː!
神が望むなら　NEG- 来る PERF.3M.SG
「彼が絶対来ませんように！」

3.2. 本論の課題

前節で見たように，チュニス方言の一般的な否定文では maː- と -ʃ が共起するが，

[9] 通時的には，この maː- のみの否定のほうが古い形式であるとみられ，固定化した表現にのみ現れるのはそのためだと考えられる。なお，Chaâbane（1996）は，（18）に見られるような，不定普通名詞と maː- のみによる否定を取り上げ，どのような不定普通名詞がこうした否定を形成するかについて詳しくまとめている。

全面的否定を表す否定文，および未来に関する強い願望を表す否定文は -ʃ と共起しない。-ʃ の意味機能について考えるさいには，なぜ全面的否定を表す否定文，および未来に関する強い願望を表す否定文は -ʃ と共起しないかを考える必要がある。

また，チュニス方言の -ʃ には，「全面的否定を表す否定文，および未来に関する強い願望を表す否定文は -ʃ とは共起しない」というだけでは割り切れない面がある。

第一に，願望を表す否定文は -ʃ と共起しないわけではないが，その場合，未来に関する願望ではなく，現在に関する願望を表すようになる。

(23)　**nʃalˤʕˤa:**　　**ma:-ʒa:-ʃ**　　cf. (22)
神が望むなら　NEG- 来る PERF.3M.SG-IRR
「彼が来てなければいいのに！」

第二に, 全面的否定を表すとみなせる文でも, bilkull《まったく》, ʒimla《まったく》を含む文には -ʃ が現れる。

(24)　**ma:**-lqi:t-u:**-ʃ**　　**bilkull**
NEG- 見つける PERF.1SG-ACC.3M.SG-IRR　まったく
「私は彼にまったく会わなかった」

(25)　**ma:-ʒa:-ʃ**　　**ʒimla**
NEG- 来る PERF.3M.SG-IRR　まったく
「彼はまったく来なかった」

第三に，ħatta:-《～も・さえ》を含む文が，《いかなる～も～ない》，という意味ではなく，《～さえ～ない》の意味を表す場合，すなわち，あるカテゴリーから最もあり得そうな例を挙げ，それを否定することで他の可能性を全面的に否定する意味の場合も，-ʃ の使用が不可欠である[10]。(26) は [ħatta:- 定名詞]，(27) は [ħatta:- 不定名詞] の例である。

(26)　**ma:**-na:kil**-ʃ**　　**ħatta-**l-aʕsˤal[11]
NEG- 食べる IMPF.1SG-IRR　も - 定 - 蜂蜜
「私は蜂蜜すら食べない」

(27)　lu:ka:n　rˤa:ʒl-ik　　jħibb-ik　　ʕla:ʃ
もし　男 -GEN.2SG　愛する IMPF.3M.SG-ACC.2SG　どうして
ma:-ʒa:b-l-ik-ʃ　　**ħatta:-fra:di:**
NEG- 持ってくる PERF.3M.SG- ～に -GEN.2SG-IRR　も - 腕輪 PL
dja:munt
ダイヤモンド

---

[10] チュニジア方言（実質的にはチュニス方言）を扱った Bahloul（1996: 79）は「-ʃ と共起する ħatta:- 否定」の例に着目しているものの，「-ʃ と共起する ħatta:- 否定」と「-ʃ と共起しない ħatta:- 否定」の意味の違いについては言及してはいない。

[11] ħatta:- は定冠詞 l- の前では ħatta- となる。

「あんたの夫が本当にあんたを愛してるんなら，どうしてあんたにダイヤの腕輪すら持ってきてないのよ [I-016]」

（26）では最も美味しくて食べやすい蜂蜜を否定することで，「バクラーワ（お菓子の名前）を食べない」，「カーディーの耳（お菓子の名前）を食べない」，「クスクス（料理の名前）を食べない」など，他のすべての食べ物を食べることを否定している。また，（27）では，夫が妻を愛している証拠の典型である「ダイヤの腕輪」を否定することで，妻を愛している証拠となり得る他のものをすべて否定している。

次の例でも，ħatta:- が -ʃ と共起する場合と共起しない場合とでは意味が異なる。

（28）　a.　ma:-ʃrˤabt-**ʃ**　　**ħatta**-l-ma:
NEG- 飲む PERF.1SG-IRR　も - 定 - 水
「私は水すら飲まなかった（すなわち，コーヒーもお茶も飲まなかった）」

b.　ma:-ʃrˤabt　**ħatta**:-ma:　la:　sˤa:bri:n　la:　sˤa:fja
NEG- 飲む PERF.1SG　も - 水　NEG　固有名詞　NEG　固有名詞
「私はどんな水も飲まなかった。サーブリーンも，サーフィヤも（いずれもミネラルウォーターの商品名）」

（29）　a.　ma:-ʕand-u:-**ʃ**　　**ħatta**-l-karˤhba
NEG- 〜にある -GEN.3M.SG-IRR　も - 定 - 車
「彼は車すら持っていない」

b.　ma:-ʕand-u:　**ħatta**:-karˤhba
NEG- 〜にある -GEN.3M.SG　も - 車
「彼は車を一台も持っていない」

-ʃ を用いない（28b）（29b）は，単に「何もない」「1 つもない」ということを述べているだけである。一方，-ʃ を用いた（28a）は，もっとも基本的な飲み物である水も飲まないのだから，コーヒーやお茶などの他のものが飲まれうる可能性などまったくないことが示唆されている。（29a）でも，金満家なら持っていて当然の車を持っていないことから，この人物が何を所有しているかは推して知るべし，というように，車以外のものに対する示唆が含まれている。

-ʃ の意味機能に関する説明は，以上述べた 3 つの現象についても説明できるものでなければならない。

4. -ʃ についての諸説の検討とその問題点

4.1. -ʃ の形態論的位置付け

ma:- と -ʃ の共起する否定は，アラビア語諸方言のうち，東方言の一部（パレスチナ，ヨルダン，イエメン，オマーンの諸地域の方言），およびエジプト方言とマグレブ方言の含まれる西方言のほとんどにおいて観察される（Wilmsen 2014: 1）。

これらの 2 つの要素は，先行研究ではさまざまに呼ばれている。たとえば，

チュニス方言を扱った Gibson（2009: 569）などの研究では接周辞（circumfix）とされ[12]，また別の研究では不連続形態素（discontinuous morpheme）などの名称が与えられている[13]。共接辞（confix, Zawadowski 1978: 86），否定複合体（negation complex, Ouhalla 2008: 357），分裂形態素（split-morpheme, Palva 2008: 406），二形態素的な否定辞（the bimorphematic colloquial negative particles, Lentin 2008: 221），否定結合体（negative association, Chater-Moumni 2012）などと記されることもある。

これらの見方において，ma:- と -ʃ の組み合わせを単一の形態素（語幹の前後に常に対で現れる接周辞）と見ているのか，それとも，2 つの形態素の組み合わせと見ているのかは必ずしも明らかではない面もあるが，少なくともチュニス方言については，3.1 節で見た諸例からも明らかなように，ma:- と -ʃ は常に対で現れるわけではないので, ma:- と -ʃ はそれぞれ単一の形態素と考えるのが妥当である。ここでは，ma:- と -ʃ は「語幹に付いてそれを補助する要素」（亀井・河野・千野（編）1996: 825）という接辞の定義を満たすことから，それぞれ接頭辞，接尾辞と考えておく。

4.2. -ʃ の意味機能についての諸説の検討

接尾辞 -ʃ の意味機能に関しては，以下の 4 種の見解がある。①は ma:- と -ʃ を接周辞とする説が暗黙の前提とすること，②～④は積極的に主張されていることである。

① -ʃ を余剰要素とみなす説
② -ʃ を否定辞とみなす説
③ -ʃ がデフォルトの否定を表示する機能を持つとする説
④ -ʃ を不定数量詞とする説

本節ではこれらの諸説の概略を述べ，その問題点を明らかにする。

① -ʃ を余剰要素とみなす説

これは，-ʃ は否定辞 ma:- に対して統語的にも意味的にも余剰の要素であるという見解である。ma:- と -ʃ を接周辞とする説はこの見解を暗黙の前提にしていると考えられるが，チュニス方言の場合，一般的な否定文では ma:- と -ʃ が共起するが，ma:- と -ʃ が常に対で現れるわけではないので，-ʃ を余剰要素とみなす説は当てはまらない。

もっとも，ma:- と -ʃ を接周辞と見るかどうかとは別に，-ʃ が余剰の要素のように見える面はある。たとえば，[ħatta:-《も，さえ》不定名詞] を含む否定文（30a）

---

[12] マルタ語を扱う Mifsud（2008: 152）や，アラビア語方言全般に渡る概説書 Versteegh（2014: 101）。

[13] Wilmsen（2014），Caubet（2008: 278）は，モロッコ方言の否定について“discontinuous ma …ʃ”と記し，Taine-Cheikh（2007: 249）は，ハッサニーヤ方言以外のアラビア語方言（チュニス方言も含むと考えられる）の否定について“discontinuous negation”と呼んでいる。

に -ʃ を付加した（30b）の文法性を調査協力者に判定してもらうと，（30a）に比べて許容度は落ちるものの，必ずしも非文とは了解されない。この場合，（30b）の -ʃ は余剰の要素のようにも見える。

（30）　a.　**ma**ː-riːt　　**ħatta**ː-ħadd
NEG- 見る PERF.1SG　も - ひと
「私は誰にも会わなかった」
b.　ʔ**ma**ː-riːt-**ʃ**　　**ħatta**ː-ħadd
NEG- 見る PERF.1SG-IRR　も - ひと

しかし，ħattaː- を含む目的語句が前置された場合には，調査協力者は -ʃ のある否定をはっきりと非文であると判定した。この場合は -ʃ の有無が文の統語的適格性に関与しており，-ʃ を余剰な要素とみなすことはできない。

（31）　a.　**ħatta**ː-ħadd　**ma**ː-riːt
も - ひと　NEG- 見る PERF.1SG
「私は誰にも会わなかった」
b.　*__ħatta__ː-ħadd　**ma**ː-riːt-**ʃ**
も - ひと　NEG- 見る PERF.1SG-IRR

② -ʃ を否定辞とみなす説

この説は，-ʃ は maː- とともに否定を表すという見解である[14]。特に，maː- と -ʃ の否定を持ついくつかの方言で -ʃ が単独で否定辞として用いられる例を根拠に，-ʃ が独立した否定接尾辞として認定されることがある。たとえば，マルタ語の否定命令（Borg and Azzopardi-Alexander 1997: 27），アンダルース方言の否定辞 iʃ（Corriente 2006: 106），一部のパレスチナ方言の完了形以外の否定（Shahin 2008: 531），エジプト方言の条件節の否定（Lucas 2010）である。また，シリア・パレスチナ・ヨルダンの方言では，否定辞 maː- の省略が観察されるという（Holes 1995: 202, n. 54）。これらの方言においては，-ʃ に否定辞としての機能を認めることができるが[15]，本論文の対象であるチュニス方言においては -ʃ が単独で否定辞として現れる例はなく，この見解は排除されるべきであろう。

③ -ʃ がデフォルトの否定を表示する機能を持つとする説

これは，-ʃ を否定極性表現（Negative Polarity Items: NPI）との関連で論ずる見解である。Ouhalla（2008）は，マグレブ方言（チュニス方言もここに含まれる）のモロッ

[14] トリポリ方言を扱った Pereira（2009: 551）では，否定辞 maː- との機能上の区別をとくにせずに“negational suffix -ʃ”としている。
[15] Esseesy（2007: 194）では，maː- と -ʃ が共起する否定から，-ʃ のほうに否定辞としての機能が移行する過程が想定されている。ただし，Wilmsen（2014）のようにこの見解を退ける研究もある。

コ方言の否定後部要素 -ʃ(i) が現れない諸例（チュニス方言では [ħatta:- 不定名詞] および ʃajj《もの》が現れる否定文）について検討した後，次のように結論づける。

> All the examples above which include a polarity or a negative expression do not include the -ʃ(i) of the negation complex. This suggests that these expressions and -ʃ(i) have the same function, and that -ʃ(i) performs this function on a default basis, i.e. in the absence of a polarity expression. (Ouhalla 2008: 359)

ここで主張されているのは，NPI の現れる否定文は全面的否定を表し，-ʃ はデフォルトの「普通の」否定を表すというように，-ʃ が NPI と相補分布をなすということである。

チュニス方言について言えば，-ʃ が NPI と相補分布しているという見方は，3.1 節でみた -ʃ と共起しない諸構文（[ħatta:- 不定名詞], [(ħatta:-) ʃajj《もの》/ ħadd《ひと》, ma:- と -la: の反復，ka:n / illa:《～しか》）にはよく当てはまる。しかし，チュニス方言には，ma:- が単独で全面的否定を表す非生産的な否定構文があり，-ʃ が常に NPI と相補分布をなすわけではない。また，先の（26）～（29）のように，ħatta:-《～も・さえ》を含む文が《～さえ～ない》の意味を表す場合は ħatta:- と -ʃ との共起が不可欠であり，この場合も -ʃ は NPI と相補分布をなすとは言えない。したがって，-ʃ がデフォルトの否定を表示し，NPI と相補分布をなすという説明は，少なくともチュニス方言には当てはまらない。

④ -ʃ を不定数量詞とする説

モロッコ方言（以下の引用文中の MA）の "negative association"（すなわち共起否定）における -ʃ について論じた Chater-Moumni（2012）は，この接尾辞について次のように結論づけている（斜体字は原著者による）。

> I claim that, in order to satisfy the "negative association," *ma-* must be attached to an *undefined* quantifier. The presence or the absence of the element *-ʃ* in MA is related to the presence or the absence of the [+undefined] feature. (Chater-Moumni 2012: 4)

ここで述べられているのは，ma- は常になんらかの不定性を必要とする否定辞であり，[ħatta:- 不定名詞]，ʃajj《もの》，ħadd《ひと》と共起するときは，この条件が満たされるので ma- だけを用いればよいが，そうではない場合は不定数量詞である -ʃ を伴わなくてはならない，ということである[16]。

---

[16] マルタ語やマグレブ方言の一部，特にモロッコ方言では，ʃ もしくは ʃi: が不定名詞の前に置かれて，《いくつかの・ある》という不定の数量を表す用法がある。Caubet（2008: 278）は（iii）の ʃi を不定冠詞とする。Chater-Moumni（2012）がモロッコ方言の -ʃ を不定数量詞としたのは，モロッコ方言におけるこの用法の存在も関わっていよう。

（iii）ʃi wəld
"a boy/some boy"

チュニス方言の -ʃ には，このような用法は存在しない。これに対応するものとして baʕðˤ《一

-ʃの出現を定性・不定性と関連させるこの見解は，-ʃについて提出されたもっとも興味深い提案の１つであり，（26），（28），（29）のような [ħattaː- 定名詞] を含む文に -ʃが現れる場合についてはうまく説明できる。しかし，（27）のような [ħattaː- 不定名詞] の場合はうまく説明できない。また，maː- 単独で全面的否定を表す場合に常に不定性が観察されるわけではなく，maː- が単独で全面的否定を表す非生産的な否定構文である（32）（＝（19））の「彼ら」は，不定の「人々」ではなく，物語の登場人物である。

（32）　w-bi-l-ʕiːn　　**maː**-riːnaː-hum　（＝（19））
そして - ～で - 定 - 目　NEG- 見る PERF.1PL-ACC.3PL
「私たちはもう彼ら（物語の登場人物たちを指す：筆者注）を目にすることは決してありませんでした [II-235]」

疑問詞も本来的に定ではありえないが，（33）のように，-ʃを含む動詞句が疑問詞から始まる節を取ることがある。

（33）　waqthaː　**maː**-ɦim-**ʃ**　　**aː**ʃ　maʕnaː　haːk-li-klaːm
当時　NEG- 理解する PERF.3M.SG-IRR　何　意味　あの - 定 - 言葉
「当時はあのことばの意味がなんなのか彼にはわからなかった [II-228]」

したがって，モロッコ方言で報告されているような，-ʃの出現を文中の不定性と単純に結びつける捉え方はチュニス方言においてはできないのである。

4.3. 本論の観点

前節で見たとおり，-ʃの機能について提出されたいずれの説も，チュニス方言の -ʃにかかわる諸現象を適切には説明していない。そこで，本論文では，この問題に取り組むにあたり，従来の研究に欠けている２つの観点を導入したい。

１つは，否定において現れる -ʃについて考察するさいに，否定以外の環境において現れる -ʃの用法を含めて考察することである。-ʃを扱った従来の研究では，否定文に現れる -ʃのみが考察対象とされてきた。これは，maː- と -ʃを不可分のものとする観点からすると当然のことであるが，-ʃを maː- とは別の形態素として扱う本論文においては，むしろ否定以外の環境において現れる -ʃが -ʃの意味機能について考えるための重要な手がかりとなると考える[17]。

部》がしばしば用いられる（例文（40）参照）。

[17] 本研究と同様に，否定の -ʃとそれ以外の -ʃとを結びつける立場をとるのが Lucas（2007, 2013）と Wilmsen（2014）である。両者はともに，maː- と -ʃが共起する否定文の発達について通時的な考察を加えたものであり, Lucas は否定の -ʃが疑問標識の -ʃへと発展したとするが, Wilmsen は反対に，否定の -ʃの前段階に疑問標識の -ʃがあったという立場をとる。ただし，いずれの研究も，否定の -ʃと疑問標識の -ʃが共時的にどのような意味機能を共有しているかについての分析はない。

もう1つは「モダリティ」という観点である。アルジェリアの一方言を扱ったMarçais（1956: 570）は，否定以外の環境に現れた -ʃ を“la particule -ʃ d'incertitude”（不確実性の小辞）と呼び，-ʃ の意味機能を話者の主観と結びつけて考察している。本論文はこの意味記述をモダリティ論の枠組みで捉えなおし，この意味機能がチュニス方言の否定とどう関連するかについて論ずる。

5. 否定環境以外での -ʃ の用法の概観

-ʃ は，他の方言中の同根語と同じく，古くは古典アラビア語の ʃajʔ《もの》と同形かそれに近い形であったと推定できるが，チュニス方言には，この ʃajʔ に由来する3種の形式が存在する。1つは本研究の対象である -ʃ であり[18]，後の2つは ʃajj《もの，（否定において）なにも》と ʃwajja《少し（ʃajj の指小形）》である。これらは -ʃ とは異なり，自由形態素であり，ここでの議論からは除外する。

チュニス方言の -ʃ は，否定環境以外では，①疑問詞の一部となる，②述語に接尾されて疑問・想像・不確実な目的などを表す，という2つの用法がある。以下，この2つの用法のそれぞれについて述べる。

5.1. 疑問詞の一部としての -ʃ

先の（33）の疑問詞 aːʃ《何》は，aː- と -ʃ が結合したものである[19]。aː- は古典アラビア語の疑問詞 ajj《どちら，どれ》と結びつけることができ，aːʃ は ajj と ʃajʔ《もの》を組み合わせた ajj ʃajʔ（格語尾は省略）に対応しているとされる[20]。

疑問詞 aːʃ は，他の名詞や前置詞などと結合して，以下のようなさまざまな疑問詞を形成する。

（34）　ʕlaːʃ《どうして》（ʕlaː-《～の上に》，例文（27））
　　baːʃ《どのように》（b-《～でもって》）
　　kiːfaːʃ《どのように》（kiːf-《～のように》）
　　waqtaːʃ《いつ》（waqt《時》）
　　qaddaːʃ《どれだけ》（qadd《程度》，例文（9））

5.2. 疑問・想像・不確実な目的などを表す標識としての -ʃ の用法

-ʃ の用法には，①疑問標識としての -ʃ，②想像を表す -ʃ，③不確実な目的を表す

---

[18] Wilmsen（2014: 146）は，方言に現れる -ʃ を，イスラム期以前のアラビア半島南部のアラビア語方言の‘existential particle’に由来するものとし，フスハーの ʃajʔ を語源とするという従来の説を「民間語源説以上のものではない（no better than a folk etymology）」（ibid: 63）として退けている。ただし，本研究のように -ʃ の意味機能を共時的に分析するさいには，-ʃ の起源を直接問題にする必要はないと考える。

[19] aːʃ には，iʃ-，ʃ- という接頭辞化した異形態もある。名詞文の疑問文には，人称辞と結合した iʃnuːwa/ʃnuːwa，iʃniːja/ʃniːja なども用いられる。

[20] Wilmsen（2014）は，方言形の aːʃ のフスハー起源説を退けている（注18も参照されたい）。

-ʃ の 3 種が認められる。他の表現と結合して，想像を表す kuːn-ʃ《もしかしたら》，不確実な目的を表す kaːn-ʃ《もしかしたら》，比喩を表す tquːl-ʃ《まるで～みたい》を作ることもできる。

5.2.1. 疑問標識としての -ʃ

命題の肯否を問う肯否疑問文は，イントネーションでも表されうるが，-ʃ が疑問標識として述語に接尾されることもある。

(35)　taˤrif-ʃ　d-dbˤaːrˤa　kiːfaːʃ?
　　知る IMPF.2SG-IRR　定 - 策　どのような
　　「どういう策があるかご存知で？ [I-055]」

(36)　ˤand-iː-ʃ　ɣaltˤa?
　　～にある -GEN.1SG-IRR　間違い
　　「私に過ちがあるのか？」

(37)　hiːja　baːhjaː-ʃ?
　　彼女　よい F.SG-IRR
　　「彼女はよい人？」

疑問標識の -ʃ を持つ方言は他にもあり [21]，これを maː- が消失したことによって生じた否定疑問文とみなすべきかどうかについて議論が行われている。Lucas（2010）はエジプト方言の同様の用法について検討し，この用法を maː- と -ʃ が共起する否定から発展したものだとした上で，これを肯定疑問文と見るべきだとしている。

チュニス方言においても，これは肯定疑問文であると考えることができる。(38) のような選択疑問文においては，[述語　willaː《あるいは》laː《否定》] という構文が用いられる。laː は否定辞であるから，willaː の前の述語は肯定のはずだが，この構文においても，述語には -ʃ が接尾されうる。したがって，疑問標識の -ʃ は肯定疑問文を作るのであり，否定疑問文から maː- が消えたものと理解することはできない [22,23]。

---

[21] 例として，モロッコ方言（Caubet 2008: 278），カイロ方言とリビア方言（Kaye and Rosenhouse 1997: 302）があげられる。

[22] ʃ- と ˤumrˤ-《年齢, 人生》とを組み合わせた肯否疑問文もしばしば見られる。この場合は《～したことがあるか？》という疑問文となる。

(iv)　ˤumrˤ-ik-ʃ　smaˤt　mrˤaː　tquːl　l-wild-haː
　　年齢 -GEN.2SG-IRR　聞く PERF.2SG 女　言う IMPF.3F.SG　～に - 息子 -GEN.3F.SG
　　「お前は女が自分の息子に言うのを聞いたことがあるか？ [II-068]」

[23] Wilmsen（2014: 115）は，チュニス方言のような疑問標識の用法を「過去の遺物」とし（the -ʃ begins to lose its interrogative quality, even while relics of that function persist in the dialects in which it appears.），疑問標識が否定辞に変化しつつあるという立場から，-ʃ の疑問標識としての用法に否定の意味を読み込んでいる。しかし，少なくともチュニス方言においては，① -ʃ 単独で明白に否定文が形成される例がないこと，②選択疑問文（40）のように，-ʃ を否定辞として理解できない例が存在すること，③後述する不確かな事態や推量を表す -ʃ の用法は否定に還

(38)　fhimt-ʃ　willaː　laː?
わかる PERF.2SG-IRR　あるいは　NEG
「わかった？　それともわからなかった？」

前述のように，肯否疑問文はイントネーションだけでも表されるが，-ʃがある場合のほうが断定性が弱いようである。たとえば，-ʃがある（39a）と -ʃがない（39b）にどのような違いがあるか，調査協力者に尋ねたところ，大きな意味の違いはないが，あえて言うならば，(39a）は「飲まなかった」という否定の答えを，(39b）は「飲んだ」という肯定の答えを期待しているという解釈がなされた。命題についての断定性の弱い疑問は，その分命題の成立に対する疑いの度合いが高いということであろう。

(39)　a.　ʃrˤabt-ʃ　ʃrˤaːb　iljuːm?
飲む PERF.2SG-IRR　酒　今日
「今日お酒飲んだ？」
b.　ʃrˤabt　ʃrˤaːb　iljuːm?
飲む PERF.2SG　酒　今日
「今日お酒飲んだ？」

-ʃは間接疑問文を作ることもできる。(40）は選択疑問文，（41）は肯否疑問文が間接疑問文となっている。

(40)　ʃkuːn　jaʕrif　jʃiddu:-k-ʃ　willaː
誰　知る IMPF.3M.SG　掴まえる IMPF.3PL-ACC.2SG-IRR　もしくは
tiʒriː-l-ik-ʃ　baʕðˤ-is-sibba?
起きる IMPF.3F.SG- ～に -GEN.2SG-IRR　一部 - 定 - 不名誉 F.SG
「人々があなたを掴まえるとか，不名誉などがあなたに降り掛かるかなど誰が知ろう [I-166]」

(41)　w-kull-ʕaskriː　jaːqif　quddaːm-uː
そして - すべて - 軍　立つ IMPF.3M.SG　～の前 -GEN.3M.SG
w-jʃuːf-uː　nðˤiːf-ʃ
そして - 見る IMPF.3M.SG-ACC.3M.SG　きれい M.SG-IRR
「全軍が彼（将軍）の前に立ち，彼（将軍）は彼（主人公）がきちんとしているかどうか見た [I-346]」

5.2.2. 主文述語に接尾される -ʃ

-ʃが主文述語に接尾される場合，話し手の想像を表すこともある。しばしば推量

元しえないことから，本研究では -ʃを否定辞としてみなす立場を取らない。また，否定以外の -ʃの用法が，いずれ消滅しつつある「遺物」であるという見解にも疑念を呈しておきたい。

の副詞 baːlik《もしかしたら》が共起する。(43) のように，-ʃ が baːlik に接尾されることもある。

(42) laːkin　**baːlik**　jdill-uː-**ʃ**　rabb-iː
しかし　もしかしたら　導く IMPF.3M.SG-ACC.3M.SG-IRR　主 -GEN.1SG
jsabbiq-l-iː　ħattaː-zwajjiz　duːrˤuː
前払いする IMPF.3M.SG- ～に -GEN.1SG　も -2　ドゥーロ
「しかしもしかしたら神様（我が主）が彼を導いてくださって，2 ドゥーロ（貨幣単位）ばかり私に前払いしてくれるかもしれない [II-190]」

(43) waːsˤil　maː-ʕmal-ʃ　taːliːfuːn　**baːlik-ʃ**　mriːðˤ
人名　NEG- する PERF.3M.SG-IR 電話　もしかしたら -IRR 病気の M.SG
「ワーシルは電話をしてこなかった。もしかしたら病気かも」

-ʃ は，《もしも～しでもしたら》という，望ましくないことを想像する気持ちを表すこともある。

(44) w-marˤrˤa　waːħid　jitʕaddaː
そして - あるとき　ひとり　通る IMPF.3M.SG
w-minɣiːrmaː-juftˤun　jdizz-**ʃ**　ʕukkaːz
そして - ～せずに - 気がつく IMPF.3M.SG　押す IMPF.3M.SG-IRR　杖 SG
min-ʕkaːkiz-hum　b-sˤabʕbˤaːtˤ
～から - 杖 PL-GEN.3PL　～で - 靴
「ときには誰かが通りがかって，気付かずに彼らの杖の一本を靴で蹴飛ばしでもしたら [I-156]」

5.2.3. 不確実な目的を表す -ʃ

-ʃ は，《～できやしないかと》という不確実な目的を表す節を作ることもできる。

(45) walla:　jfarkis　jalqaː-**ʃ**
ついに～になる PERF.3M.SG　探す IMPF.3M.SG　見つける IMPF.3M.SG-IRR
ħattaː-ħʃiːʃa　jaːkil-haː
も - 草 F.SG　食べる IMPF.3M.SG-ACC.3F.SG
「ついに彼は食べ物になる草でも見つかりやしないかと探しはじめた [II-088]」

(46)，(47) では接続詞 baːʃ《～のために》の補文で -ʃ が用いられ，やはり《～できやしないかと》という不確実な目的を表す。

(46) huːwa　jħatˤtˤab　fi-l-ɣaːba　**baːʃ**
彼　薪を取る IMPF.3M.SG　～の中 - 定 - 森　～するため

jrˢawwaħ-ʃ　bi-ħmajjil　ħtˢab
帰る IMPF.3M.SG-IRR　～で - 荷 M.SG 薪
jbiːʕ-uː
売る IMPF.3M.SG-ACC.3M.SG
「彼は売り物になる薪の荷を持ち帰れやしないかと，森で薪を取っていた [II-041]」

(47) wallaːt　tʕajjitˢ　bi-sˢ-sˢuːtiːn
ついに～になる PERF.3F.SG 呼ぶ IMPF.3F.SG ～で - 定 - 声 DU
w-θ-θlaːθa　**baːʃ**　tʒiː-haː-ʃ
そして - 定 -3　～するために　来る IMPF.3F.SG-ACC.3F.SG-IRR
waħda　min-hum
ひとり F.SG　～のうち -GEN.3PL
「彼女たち（召使いたち）のうちの誰かが来てくれやしないかと，ついに彼女は 2 回，3 回と人を呼んだ [II-221]」

baːʃ の補文では，(48) のように -ʃ が用いられないこともあるが，その場合は目的達成の不確実さという意味は感じられない。

(48) ʒiːt-ik　**baːʃ**　tʕaːwin-niː
来た PERF.1SG-ACC.2SG ために　助ける IMPF.2SG-ACC.1SG
「私はあなたに助けてもらうためにあなたのところに来ました」

(49) は，laː《～しないように》の補文で -ʃ が用いられている。この場合は -ʃ が不可欠である。

(49) w-ʃaddit　iθ-θniːja　fiːsaʕ
そして - 取る PERF.3F.SG　定 - 道　急いで
laː　jisbaq-haː-ʃ　ħadd-aːxur
～ないように　先に行く IMPF.3M.SG-ACC.3F.SG-IRR　ひと - 他の
w-talqaː　l-buqʕa　tħaːzit
そして - 見つける IMPF.3F.SG 定 - 場所 F.SG　所有される PERF.3F.SG
「彼女は出発した。だれか他の人が彼女より先に着いて，すでにその場所が取られているのを彼女が見い出すようなことなどないように急いで [I-239]」

5.2.4. 想像を表す kuːn-ʃ，不確実な目的を表す kaːn-ʃ，比喩を表す tquːl-ʃ

-ʃ は種々の表現と結合して，想像・不確実な目的・比喩を表す表現を作る。

-ʃ が存在の動詞 kaːn に由来すると見られる kuːn と共起した kuːn-ʃ《もしかしたら，ひょっとしたら，だとしたら》は，やはり話し手の想像を表す。

（50）A: it-taːj　fiː-tuːnis　muːʃ　baːhiː
定 - お茶 M.SG　～の中 - チュニスNEG　良い M.SG
「チュニスのお茶はおいしくない」
B: **kuːn-ʃ**　ʃrˤabt　fi-l-qahwa　muːʃ　baːhja
もしかしたら 飲む PERF.2SG ～の中 - 定 - カフェ NEG　よい F.SG
「もしかしたらよくないカフェで飲んだのかも」

また，条件節の接続詞 kaːn《もしも》と -ʃ の結合体である kaːn-ʃ《もしかしたら》は，接続詞 maː と組み合わせて，不確実な目的を表す節を作る。

（51）saːmaħniː　xuːjaː　aːnaː　ʒiːt-ik　**kaːn-ʃ**
すみません　お兄さん　私　来た PERF.1SG-ACC.2SG　もしかしたら
maː　tˤaːwin-niː
接続詞　助ける IMPF.2SG-ACC.1SG
「すみません，お兄さん，私はあなたに助けてもらえたらとあなたのところに来ました」

kaːn-ʃ maː を用いた（51）と目的を表す baːʃ《～のために》を用いた前述の（48）とを比較したさいの話者の意見によれば，前者が非常に控え目に要求しているのに対して，後者には厚かましさが感じられるという。これは，kaːn-ʃ においては目的の達成がより不確実なものとして表現されているため，baːʃ《～のために》に比べて押し付けがましさがなく理解されるからであろう。

-ʃ は，比喩を表す固定的な結合体 tquːl-ʃ《まるで～みたい》にも含まれる。

（52）aħnaː　tawwa　**tquːl-ʃ**　fi-l-ħammaːm
私たち　今　まるで　～の中 - 定 - 蒸し風呂
「今私たち，まるで蒸し風呂にいるみたい」

tquːl-ʃ は，動詞 qaːl《言う》の未完了 2 人称単数形 tquːl に -ʃ が接尾されたものであり，文字通り解釈すれば《あなたは～と言うかもしれない》となろう。ただし，2 人称単数はここでは特定の指示対象を持たず，このまま《まるで～みたい》という意味の固定的な比喩表現を作る。比喩は一種の想像であるから，話し手の想像を表しうる -ʃ が比喩も表しうることは自然なことであると思われる。

5.3. -ʃ の非現実モダリティ表示機能

すでに触れたように，-ʃ は“la particule -ʃ d’incertitude”（不確実性の小辞）として不確実性と結びつけられていることがある。たしかにここまで見てきた -ʃ の諸用法を見る限り，-ʃ が事物や事態の不確実性を表示していると理解することができる。5.1 節で見た疑問詞の一部としての -ʃ は，話者にとって存在は分かっているも

のの何であるかについて不明な事柄を表示するのに用いられている[24]。事物や事態の内容が話者にとって不明であるからこそ疑問として尋ねるのであるから，疑問詞で -ʃ が現れるのは理にかなったことである。また，5.2 節で見た -ʃ が疑問・想像・不確実な目的を表す場合も，疑問詞の一部としての -ʃ の延長として，事態の実現が話者にとっては不明もしくは不確実であることを表すと説明できる。

疑問・想像・不確実な目的を表す -ʃ と否定の -ʃ は，述語に接尾されるという共通の統語的特徴を持つことから，否定の -ʃ も，疑問・想像・不確実な目的を表す -ʃ と同じく，話者が事態の実現を不確実なものとして把握していることを表示するという意味機能を持っている可能性がある。また，このことは「モダリティ」という観点から次のように説明し直すことができると考えられる。

モダリティとは，命題をどのように提示するかという話者の態度・判断を言語化したものであり，その基本的概念の 1 つに現実性（realis）と非現実性（irrealis）の区別がある。前者は命題が現実世界での生起に関わるという話者の判断を表示するのに対し，後者は命題が非現実世界（想像や思考の世界）での生起に関わるという話者の判断を表示する（Palmer 2001: 1）。いずれのモダリティも話者の判断であることにはかわりはないが，現実モダリティは事態が現実世界内に定位していることを表し，非現実モダリティは事態が現実世界に定位していないことを表す。

5.2 節で見た，想像や不確実な目的を表す -ʃ の諸例を振り返ると，いずれの場合も -ʃ を含む文で提示される命題は，現実世界において生起したというよりも，話者の想像の世界において生起したものである。その意味で，「不確実性の小辞」としての -ʃ は，非現実モダリティを表示すると考えることができる。（52）のような比喩的用法も，不確実性というよりも，非現実性に根ざすとしたほうがよりよく解釈できる。

また，モダリティ論においては，否定と疑問はともに「非断定的」であるという点で共通し（Palmer 2001: 53），この非断定性は非現実モダリティと深く関わっていることが指摘されている（ibid.: 4）。これは通言語的に否定と疑問において非現実的モダリティの関与がしばしば観察されるという事実による（ibid.: 11–13, Elliott 2000: 77–80）が，チュニス方言の -ʃ もこうした現象と結びつけて考えることができる[25]。

以上のことから，チュニス方言の -ʃ の疑問・想像・不確実な目的・比喩といった用法には，「非現実モダリティ表示」という共通の機能を仮定することができると考える。次節では，このことがチュニス方言の否定文における -ʃ の使用不使用（言い換えれば否定辞 ma:- との共起非共起）とどのように関係するかを検討する。

---

[24] 注 16 で見たモロッコ方言の ʃi の不定の数量を表す用法にも，話者にとって何であるかは分かっているものの数量の点で不確実なモノやヒトを表示するという意味での不確実性が認められる。

[25] ただし，肯否疑問文において疑問標識 -ʃ は義務的なものではない。話者が疑問の非断定性を強調したい時に -ʃ が用いられると考えられる。

6. 共起否定における -ʃ と非現実モダリティ

6.1. 現実的否定と非現実的否定

冒頭で述べたように，チュニス方言の一般的な否定文は maː- と -ʃ が共起する。

（53）　muːlaːt-haː　　**maː**-qaːlit-**ʃ**
所有者 F.SG-ACC.3SG.F　NEG- 言う PERF.3F.SG-IRR
ʕlaː-sm-haː（＝（1））
～について - 名前 -GEN.3F.SG
「その（物語の）所有者（すなわち語り手）はそのタイトルについては言わなかった [I-009]」

（54）　**maː**-θammaː-**ʃ**　　faːjda　（＝（2a））
NEG- ～ある -IRR　利益
「益がない」

（55）　**maː**-xðaː-**ʃ**　　fluːs　（＝（3a））
NEG- 取る PERF.3M.SG-IRR　お金
「彼はお金を取らなかった」

これらの文は,「語り手がタイトルについて言う」,「益がある」,「彼がお金を取る」ということが現実世界において事実ではないことを表している。「肯定的事態が事実ではない」ことを述べる文と言ってもよいだろう。

これに対し，3.1 節で概観した全面的否定を表す次の否定文は -ʃ とは共起しない（同じく 3.1 節で言及した nʃalˤlˤaː《lit. 神が望むなら》に完了形が後続して未来に関する強い願望を表す否定文については次節で述べる）。

（56）　A. maː- が [ħattaː-《～も・さえ》不定名詞]，[(ħattaː-) ʃajj《もの》/ ħadd《ひと》] と共起する構文
B. 否定辞 maː- を反復する，もしくは maː- の後に否定辞 laː を反復する構文
C. maː- が kaːn / illaː《～しかない》と共起する構文
D. 人称辞を接尾した ʕumrˤ-《年齢，人生》，もしくは walˤlˤaːh《神かけて》と maː- が共起する構文

全面的否定を表すこれらの否定文は, 否定の程度が全面的であることを通じて「否定的事態が事実である」ことを述べる文である。

先に，maː- と -ʃ が共起する一般的な否定文を「肯定的事態が事実ではない」ことを述べる文だとしたが，この「肯定的事態が事実ではない」とは，ある肯定的事態が現実世界におけるいかなる事態とも対応しないということである。この逆は，ある肯定的事態が現実世界におけるある事態と一対一で対応していることであり，これを表す文は「肯定的事態が事実である」ことを述べる文となる。

（56）の否定文では，否定の全面性によって，あらゆる事態の可能性が排除されている。これは，見方を変えれば，否定的事態そのものが現実世界におけるたった

1つの事態となるということであり，その意味では，この否定的事態は現実世界においてある事態と一対一で対応していることになる。このため，全面的否定を表す否定文においては，否定的事態は事実として述べられるのである。

次にあげる [ħatta:-《～も・さえ》不定名詞] を用いた（57），ma:- と la: の反復を含み最小量の否定を表す（58）は，「益がない」，「彼はお金を取らない」という否定的事態を，その程度が全面的であることを通じて，事実として述べている。

(57)　**ma:**-θamma:　**ħatta:**-fa:jda　（＝（4））
NEG- ～ある　も - 利益
「なんの益もない」

(58)　a.　**ma:**-xða:　flu:s　**w-la:**　**kaʕba**　（＝（11a））
NEG- 取る PERF.3M.SG　お金　そして -NEG　1つ
「彼は1ミッリームだってお金を取らなかった」

b.　**ma:**-xða:　**la:**　flu:s　**w-la:**　**kaʕba**　（＝（11b））
NEG- 取る PERF.3M.SG NEG　お金　そして -NEG　1つ
「彼はまったくお金を（lit. お金も1ミッリームも）取らなかった」

(59)，(60) も，ma:- の反復，ma:- と la: の反復によって示される否定の全面性によって「私が知らない」，「食べ物がない」ことが事実として述べられている。

(59)　**ma:**-ʕraft　idda:-ni:　n-nu:m
NEG- 知る PERF.1SG　連れ去る PERF.3M.SG-ACC.1SG　定 - 眠り
ma:-ʕraft　duxt　**ma:**-ʕraft
NEG- 知る PERF.1SG　気を失う PERF.1SG　NEG- 知る PERF.1SG
qadda:ʃ　qaʕdit　ttˤi:r　bi:-ja:　（＝（9））
どれだけ　居る PERF.3F.SG　飛ぶ IMPF.3F.SG　～と -GEN.1SG
「眠りが私を連れ去ったのも知らず，気を失ったのも知らず，それ（ハト F.SG）が私を連れてどれくらい飛んだのかも知らなかった [II-135]」

(60)　**ma:**-θamma:　**la:**　xubz　**la:**　ħli:b　（＝（10））
NEG- ある　NEG　パン　NEG　牛乳
「パンも牛乳もない」

ka:n《～しか》，illa:《～しか》を用いた（61）も，意味的には「私」以外のすべての人物において「彼女を見なかった」という事実が成り立つということが述べられている。

(61)　**ma:**-ʃuft-ha:　**ka:n / illa:**　a:na:　（＝（12））
NEG- 見る PERF.1SG-ACC.3F.SG　～しか　私
「私しか彼女を見なかった」

ʕumrˤ-《年齢，人生》，walˤlˤa:h《神かけて》と ma:- によって形成される否定文も，

その程度が全面的であることを通じて，過去あるいは現在・未来において文の表す事態が生じないことを事実として述べるものである。

このように見ていくと，チュニス方言においては，「肯定的事態が事実ではない」ことを述べる文では maː- と -ʃ が共起するのに対して，「否定的事態が事実である」ことを述べる否定文では maː- と（56）に挙げた諸形式が共起し，-ʃ は用いられないと考えることができる[26]。

「否定的事態が事実である」ことを述べる否定文は，断定的・事実的な否定であり，事態が存在しないことを現実世界の領域に定位させるという点で現実的なものである。このような否定を「現実的否定」と呼ぶことにしよう。

いっぽう，「肯定的事態が事実ではない」ことを述べる否定文は，非断定的・非事実的な否定であり，肯定的事態を現実世界に定位させないという意味で非現実的であると考えられる。このような否定を「非現実的否定」と呼べば，maː- と -ʃ が共起する否定文は「非現実的否定」を表す否定文ということになり，これは -ʃ を非現実モダリティ表示要素とする本論の解釈と矛盾しない。まとめると次のようになる。

（62）　-ʃ と共起しない否定：否定的事態が事実であることを述べる現実的否定
　　-ʃ と共起する否定：肯定的事態が事実ではないことを述べる非現実的否定

冒頭で述べたように，チュニス方言の一般的な否定文では，maː- と -ʃ の共起が義務的であり，-ʃ を削除すると非文となる。調査協力者は，maː- と -ʃ が共起する否定文から -ʃ を削除すると，後に続くべき部分のない不完全な文と認識し，（63c, d）のような全面的否定を表す形式を補うべきだとする。全面的否定を表す形式と -ʃ のいずれかがないと現実的否定か非現実的否定かが決まらず，そのような現実性・非現実性に関する方向づけを欠いた否定文は構文的に不安定となるということであろう。

（63）　a.　**maː**-kliːt-**ʃ**　xubza
　　NEG- 食べる PERF.1SG-IRR　パン
　　「私はパンを食べなかった」

　　b.　*__maː__-kliːt xubza

　　c.　**maː**-kliːt　xubza　**w-laː**　**ħatta**ː-ʃajj
　　NEG- 食べる PERF.1SG　パン　そして -NEG　も - もの
　　「私はパンも何も食べなかった」

　　d.　**maː**-kliːt　xubza　**maː**-ʃrˤabt　maː…
　　NEG- 食べる PERF.1SG　パン　NEG- 飲む PERF.1SG　水
　　「私はパンも食べず，水も飲まず……」

[26] maː- が単独で全面的な否定を表す非生産的な否定構文について同じことが当てはまるどうかについては，ここでは判断を保留しておく。

6.2. -ʃ に関連する現象の説明

-ʃ と共起する否定は肯定的事態が事実ではないことを述べる非現実的否定であるという見方にもとづき，3.2 節，4.2 節で述べた -ʃ に関連する現象の説明を試みる。

まず取り上げるのは，ħatta:-《～も・さえ》を含む文が《いかなる～も～ない》という意味を表す場合は -ʃ は使用されないが，《～さえ～ない》の意味を表す場合は逆に -ʃ の使用が不可欠になるという現象である。

(64)　a.　ma:-ʕand-u:**-ʃ**　　**ħatta**-l-karˤhba　（＝（29a））
NEG- ～にある -GEN.3M.SG-IRR　も - 定 - 車
「彼は車すら持っていない」

b.　ma:-ʕand-u:　　**ħatta:**-karˤhba　（＝（29b））
NEG- ～にある -GEN.3M.SG　も - 車
「彼は車を一台も持っていない」

-ʃ を用いない（64b）は，「彼は車を持たない」という否定的事態が，その「持たない」程度が「一台もない」であることを通じて，事実であると述べる文である。いっぽう，-ʃ を用いた（64a）は，「彼は車を持たない」という否定的事態が事実であることを表すというよりは，「金満家なら最低限車くらいは持っている」という肯定的事態が現実世界の「彼」において事実ではないことを表すために，-ʃ の使用が不可欠になると考えられる。

次に取り上げるのは，全面的否定を表すとみなせる文でも，bilkull《まったく》，ʒimla《まったく》を含む文には -ʃ が現れるという現象である。

(65)　**ma:**-lqi:t-u:**-ʃ**　　**bilkull**　（＝（24））
NEG- 見つける PERF.1SG-ACC.3M.SG-IRR　まったく
「私は彼にまったく会わなかった」

(66)　**ma:**-ʒa:**-ʃ**　　**ʒimla**　（＝（25））
NEG- 来る PERF.3M.SG-IRR　まったく
「彼はまったく来なかった」

bilkull，ʒimla は，（56）で挙げた全面的否定を表す諸形式とは異なり，付加詞として文全体を修飾している。したがって，これらの要素の機能は，否定的事態の全面性を表すというよりも，「その肯定的事態は事実ではない」という非現実的否定自体を強めることにあるため，-ʃ と共起しうるのだろう。

次に取り上げるのは，nʃalˤlˤa:《lit. 神が望むなら》を用いた願望を表す否定文が，-ʃ を用いない場合は未来に関する強い願望を表すのに対し，-ʃ と共起した場合は現在に関する願望を表すようになるという現象である。

(67)　**nʃalˤlˤa:**　　ma:-ʒa:!　（＝（22））
神が望むなら　NEG- 来る PERF.3M.SG

「彼が絶対来ませんように！」

(68)　**nʃalˤlˤa:**　　**ma:-ʒa:-ʃ**　（＝（23））
神が望むなら　NEG- 来る PERF.3M.SG-IRR
「彼が来てなければいいのに！」

未来に関する強い願望において現実的否定が現れるのは，願望される事態に言語上の現実性を付与し，否定的事態をすでに実現したかのように扱う話者の態度に起因すると考えられる。また，-ʃ と共起した場合に現在の願望を述べることになるのは，話者が思うがままに願望を述べうる未来の事態とは異なり，現在の事態についてはそれが現実世界において実際に起こっている可能性があるため，話者の願望は必然的に非現実的なものとならざるを得ないからではないかと考えられる。

最後に取り上げるのは，(69a) に -ʃ を加えた (69b) は普通ではないが許容されうる文であるのに対し，(70b) のように ħatta:-ħadd《も - ひと》を ma:- の前に置くと -ʃ の使用が不可になる現象である。

(69)　a.　**ma:-ri:t**　　**ħatta:-ħadd**　（＝（30a））
NEG- 見る PERF.1SG　も - ひと
「私は誰にも会わなかった」

b.　ʔ**ma:-ri:t-ʃ**　　**ħatta:-ħadd**　（＝（30b））
NEG- 見る PERF.1SG-IRR　も - ひと

(70)　a.　**ħatta:-ħadd**　**ma:-ri:t**　（＝（31a））
も - ひと　NEG- 見る PERF.1SG
「私は誰にも会わなかった」

b.　*__ħatta:-ħadd__　**ma:-ri:t-ʃ**　（＝（31b））
も - ひと　　NEG- 見る PERF.1SG-IRR

(69b) では，非現実否定を表す ma:-ri:t-ʃ《見なかった》で「肯定的事態が事実ではない」ことを述べたあとで，それを「否定的事態が事実である」ことと捉え直して，ħatta:-ħadd《誰も》で否定の程度を述べていると考えられる。一方，(70b) では，ħatta:-ħadd《誰も》を前置して「否定的事態が事実である」ことを述べることを前置きしながら，非現実否定を表す ma:-ri:t-ʃ《見なかった》で「肯定的事態が事実ではない」ことを述べている。1 つの文で「非現実的否定」から「現実的否定」に方向転換することはそれほど不自然ではないが，「現実的否定」から「非現実的否定」に方向転換するのは不自然だということであろう。

7. 結論

本論文においては，アラビア語チュニス方言の共起否定文に現れる -ʃ について，否定以外の用法を踏まえて検討し，非現実モダリティを表示する標識であることを明らかにした。また，-ʃ が否定以外では疑問・想像などの非現実モダリティを表示

し，-ʃを用いた否定文と -ʃを用いない否定文が「非現実的否定」と「現実的否定」という対立をなすことを明らかにした。このことは，チュニス方言の肯定文・否定文の意味が肯定・否定，現実・非現実という 2 つの対立を軸として，次の表 1 のように整理できることを意味する。

表 1　肯否・現実非現実の対立と maː- と -ʃ

	肯定	否定
現　実	X （断定・事実）	maː-X （現実的否定）
非現実	X-ʃ （想像・疑問）	maː-X-ʃ （非現実的否定）

maː- も -ʃも使用しない文は [＋現実性]，すなわち断定・事実を表す肯定文である（例（71））。-ʃを使用して maː- を使用しない文は [－現実性] の文，すなわち話し手の想像を表す平叙文もしくは肯否疑問文である（例（72a, b））。また，maː- を使用して -ʃを使用しない文は [＋現実性] の否定文（例（73）），maː- と -ʃが共起する文は [－現実性] の否定文である（例（74））。チュニス方言の一般的な否定文は -ʃが用いられるが，-ʃの出現に関与しているのは肯定･否定の対立ではなく，現実･非現実の対立であるという点が重要である [27]。

（71）　ʕand-uː　　karˤhba
～にある -GEN.3M.SG　車
「彼は車を持っている」

（72）　a.　laːkin　baːlik　　jdill-uː-ʃ　　rabb-iː
しかし もしかしたら　導く IMPF.3M.SG-ACC.3M.SG-IRR主 -GEN.1SG
jsabbiq-l-iː　　ħattaː-zwajjiz　duːrˤuː（＝（42））
前払いする IMPF.3M.SG- ～に -GEN.1SG　も -2　　ドゥーロ
「しかしもしかしたら神様（我が主）が彼を導いてくださって，2 ドゥーロ（貨幣単位）ばかり私に前払いしてくれるかもしれない [II-190]」

b.　ʕand-uː-ʃ　　karˤhbaʔ
～にある -GEN.3M.SG-IRR　車
「彼は車を持っているか？」

（73）　**maː**-ʕand-uː　　ħattaː-karˤhba　（＝（29b））
NEG- ～にある -GEN.3M.SG　も - 車

[27] Elliott（2000: 78）では，否定の作用域という観点から，否定と現実性・非現実性との関連について 2 つの言語類型が提案されている。すなわち，否定の作用域が文全体に及ぶため，否定が現実性のもとに捉えられる言語と，否定の作用域が述部の行為のみに及ぶため，否定が非現実標識と共起する言語という 2 種である。これにしたがえば，現実的否定と非現実的否定の区別をするチュニス方言のような言語は，第 3 の類型をなすこととなろう。

「彼は車を一台も持っていない」

(74)　**ma:**-ʕand-u:-ʃ　　ħatta-l-karʕhba　（＝（29a））

NEG- ～にある -GEN.3M.SG-IRR　も - 定 - 車

「彼は車すら持っていない」

ma:- と -ʃ によって形成される否定文を持つアラビア語諸方言は多いが，本研究で述べた解釈をさらに深めるためには，これらの言語の分析を加えることが不可欠である。また，本研究で示したような肯否と現実・非現実モダリティの相互作用が他の言語においてはどのように実現しているかについて分析と考察を行うことも，言語の本質に関わる興味深い課題である。

参照文献

Bahloul, Raja Mallek (1996) Negation in French and Tunisian Arabic. In: Mushira Eid (ed.) *Perspectives on Arabic linguistics VIII*, 67–83. Amsterdam/Phila-delphia: John Benjamins Publishing Company.

Borg, Albert and Marie Azzopardi-Alexander (1997) *Maltese*. London/New York: Routledge.

Chatar-Moumni, Nizha (2012) Negation in Moroccan Arabic: Scope and focus. Arabic language and linguistics. In: Reem Bassiouney and Katz E. Graham (eds.) *Georgetown University Round Table 2010, Arabic language and linguistics (GURT 2010)*, 3–15. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Caubet, Dominique (2008) Moroccan Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2008), 273–287.

Chaâbane, Nadia (1996) La négation en arabe tunisien. In: Salem Chakar and Dominique Caubet (eds.) (1996) *La négation en berbère et en arabe maghrébin*, 117–134. Paris: L'Harmattan

Corriente, Federico (2006) Andalusi Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2006), 101–111.

Elliott, Jennifer R. (2000) Realis and irrealis: Forms and concepts of the grammaticalisation of reality. *Linguistic Typology* 4: 44–90.

Esseesy, Mohssen (2007) Grammaticalization. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2007), 191–198.

Gibson, Maik (2009) Tunis Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2009), 563–571.

Holes, Clive (1995) *Modern Arabic: Structures, functions, and varieties*. London/New York: Longman.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大事典第 6 巻』東京：三省堂.

Kaye, Alan S. and Juduth Rosenhouse (1997) Arabic dialects and Maltese. In: Hetzron Robert (ed.) *The Semitic Languages*, 263–311. London/New York: Routledge.

Lentin, Jérôme (2008) Middle Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2008), 215–224.

Lucas, Christopher. (2007) Jespersen's cycle in Arabic and Berber. *Transactions of the Philological Society* Volume 105, Issue 3, 398–431. Blackwell Publishing Ltd.

Lucas, Christopher (2010) Negative -š in Palestinian (and Cairene) Arabic: Present and possible past. *Brill's annual of Afroasiatic languages and linguistics 2*, 165–201. Leiden/Boston: Brill.

Lucas, Christopher (2013) Negation in the history of Arabic and Afro-Asiatic. In: David Willis, Christopher Lucas, and Anne Breitbarth (eds.) (2013) *The history of negation in the languages of Europe and the Mediterranean. Volume I: Case studies*, 399–452. Oxford: Oxford University Press.

Marçais, Philippe (1956) *Le parler Arabe de Djidjielli (Nord constantinois, Algérie)*. Paris: Librarie d'Amerique et d'Orient Adrien Maisonneuve.

Mifsud, Manwel (2008) Maltese. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2008), 146–159.

Ouhalla, Jamal (2008) Negation. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2008), 355–360.

Palmer, Frank R. (2001) *Mood and modality (Second edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.

Palva, Heikki (2008) North West Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2008), 400–408.

Pereira, Christophe (2009) Tripoli Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2009), 548–556.

Shahin, Kimary N. (2008) Palestinian Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2008), 526–538.

Taine-Cheikh, Catherine (2007) Ḥassāniyya Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds.) (2007), 240–250.

Versteegh, Kees (2014) *The Arabic language (second edition)*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2006) *Encyclopedia of Arabic language and linguistics Vol. I*. Leiden/Boston: Brill.
Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2007) *Encyclopedia of Arabic language and linguistics Vol. II*. Leiden/Boston: Brill.
Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2008) *Encyclopedia of Arabic language and linguistics Vol. III*. Leiden/Boston: Brill.
Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2009) *Encyclopedia of Arabic language and linguistics Vol. IV*. Leiden/Boston: Brill.
Wilmsen, David (2014) *Arabici indefinites, interrogatives, and negators: A linguistic history of Western Dialects*. Oxford: Oxford University Press.
Zawadowski, Y. N. (1978) *The Maghrib Arabic dialects*. (Translated from the Russian by S. S. Gitman and A. Y. Militaryov). Moscow: Nauka Publishing House.

執筆者連絡先：
271-0073 千葉県松戸市小根本 38-4
e-mail: cyberbbn@gmail.com

［受領日　2018 年 1 月 3 日
最終原稿受理日　2019 年 3 月 30 日］

Abstract

Negation and Irrealis Modality in Tunis Arabic

Taku Kumakiri

Negative sentences in Tunis Arabic are usually formed by two particles: a prefix *ma:-* and a suffix *-ʃ*, which are simultaneously affixed to a predicate. Previous studies regard the former as a negative maker, while researchers have proposed various interpretations regarding the function of the latter. The present paper aims to define the semantic property of the suffix *-ʃ* from two viewpoints which have not been adopted in the previous studies: (i) relationship between the function of *-ʃ* in non-negative contexts and that in negative contexts, and (ii) *-ʃ* as a marker of *irrealis* modality. The survey shows that the suffix *-ʃ* in non-negative contexts denotes inference or interrogative, while in negative contexts, non-assertive or nonfactual. In terms of modality, all these notions share the common feature of irrealis. Therefore, the suffix ***-ʃ*** can be defined as an irrealis modality marker. As it is possible to regard the distinction between realis and irrealis as a polarity, four related modalities can be distinguished by a combination of two polarities of negative-affirmative and realis-irrealis. Thus, in Tunis Arabic, these four modalities are encoded by use of the negative marker ***ma:-*** and the irrealis modality marker ***-ʃ***: affirmative realis sentence is marked by the absence of both markers, negative realis sentence is marked by the use of ***ma:-***, affirmative irrealis sentence by the use of ***-ʃ***, and negative irrealis sentence by the use of both markers.